

日本生殖工学会

2013.06.30 東京

閉鎖型凍結法による凍結融解単一胚盤胞移植によって生まれた児の予後調査

医療法人三慧会 IVF なんばクリニック

天羽 杏実、橋本 周、濱 聡子、大住 哉子、森本 義晴

胚の凍結保存を行う際に、従来の開放型凍結法(open vitrification system; OVS)では、胚と液体窒素との直接接触による液体窒素からの細菌やウイルスによる汚染が危惧されている。液体窒素と接触のない閉鎖型凍結法(closed vitrification system; CVS)は、汚染リスクの低減が期待されている。本研究では、CVS と OVS の胚移植後の出生児への影響を比較した。2012 年 1～9 月に凍結融解単一胚盤胞移植を実施した 253 周期(CVS:105 周期 vs. OVS:148 周期)から得られた児の予後調査を行った。着床率、胎児心拍確認率、8 週以上の継続妊娠率(CVS:53.3%、46.7%、82.1%vs. OVS:50.0%、47.5%、86.1%)に有意差は見られなかった。出産に至った 88 人(CVS:35 人、OVS:53 人)の児のうち、出生児の体重、在胎日数、奇形率(CVS:2963g、265.3 日、3.1% vs. OVS:3027g、275.4 日、0.0%)に有意差は見られなかった。以上の結果から、CVS は発生能を損なうことなく、従来の OVS と同等の妊娠成績を示し、児を得られることが明らかになった。